巨乳ファンタジー３

鏡裕之・音声収録秘話

■ はじめに

ぼくのキャラクターというのは、アニメフェイクなんですね。つまり、アニメ的なお芝居をするキャラに見えてしまう。でも、シナリオを読み込んでいくと、アニメ寄りではなく洋画寄り（役者さんたちは外画寄りという言い方をします）だということがわかってくる。そういう、非常に癖のあるキャラなのです。

キャラクターの変化のことをキャラクターアークと言いますが、ぼくが描くヒロインたちはキャラクターアークを起こします。劇的に。そのために、キャラクターアークが起きるまでは外画寄り（洋画寄り）にしてアニメ的なものをがんがんに抑えて、ファーストインプレッションを徹底的に貫くお芝居をお願いするということになる。

おまけにキャラクターの格というのが関わってくる。格というのは、たとえば国王の格、宰相の格、将軍の格、州長官の格、地方城主の格、庶民の格ということです。格が違えば、お芝居も変わります。同じように怒っていても、庶民が怒るのと、格の高い人が怒るのとは違います。格の違いは主に男性に関わってきますが、女性ヒロインも関わってきます。特にどの格でお芝居するかで、その人の社会的ポジションや高貴さが変わってしまうので、格は、ぼくが書くキャラクターでは非常に重要な要素です。

■ パイア

パイア役「綾音まこ」さんについては、全然迷わなかったですね。ボイスサンプルの中に、ぼくが頭の中でイメージしていたものと同じ声、同じ声質のものが入ってたんです。この方だ！　と。

収録初日、当初、役者さんからはアニメ寄りの媚び媚びのかわいさ満載の演技でいただきました。それからキャラ調整をお願いして、媚び媚びした感じを外す作業を２、３回して、外画寄りの演技の方でお願いする形にしました。

パイアは、第一部の中だけでも、主人公への感情や関係性が３段階も変化するヒロインなんです。だから、最初から媚び媚び、つまり、甘々にしてしまうと、変化が出なくなっちゃうんですね。甘々ってトップギアみたいなものだから、それ以上が出なくなっちゃう。結果、差がつかなくなって、ぺったんこになってしまう。それで「これ以上、媚びを抑えすぎちゃうとやばいかも」というラインまで調整していただきました。

甘々になりすぎないように、媚び媚びになりすぎないように、というのは、パイアの収録で終始気をつけてぼくがお願いしていたことです。最初のエッチシーンが途中からちょっと甘々になっちゃったので、急遽収録にストップを掛けて、甘々を弱めた感じでお芝居いただいたり。エッチシーンが終わって日常シーンに戻った時に、甘々な感じが出すぎちゃった時にストップを掛けて、甘々を抑えていただいたり。甘々が蔓延するようになると、本当にパイアが甘々のお芝居をする時に、差がつかなくなって、ぺったんこになるんです。

巨乳ファンタジー３　鏡裕之・音声収録秘話
Talking about Kyonyu Fantasy 3

ぼくが書くキャラクターには、キャラクターアークがあります。特にヒロインは、キャラクターアークの後に大きく変貌します。だから、キャラクターアークまではとにかく抑えるんですね。抑えないと、キャラクターアークの後の「あ、自分に好感を持ってくれた」「自分をレスペクトしてくれるようになった」という部分が、出なくなっちゃうんです。出せたとしても、非常に微弱になってしまう。だから、キャラクターアークまでは抑えるんですね。パイアの場合は、甘々を抑えるということでした。綾音まこさんの声自体が、元々ステキな甘さを持っているということもありましたし、せっかくの甘さは、ここぞという時にこそ使いたかった。そのために、何回も「弱めてください」「抑えてください」というお願いをしました。綾音まこさんからすると、ご自身が思っていたのとは違うラインだったので大変だったかもしれませんが、よく演じてくださったと思います。おかげでパイアは、これぞメインヒロイン、というキャラクターになったと思います。

■ アジュラ

アジュラは、ヒロインの中で１、２を争う難しいキャラクターです。収録している時は、難易度はあんまり感じなかったんですけどね。とにかく、琴吹司さんが抜群に上手かった。２０年エロゲーをつくってきて、女性役者としては一番上手い方だなと感じました。玄人じゃないと、なかなかその上手さはわからないかもしれないけど。合わせの音声を収録する時に「せ～の」って役者さんが言うんですけど、その「せ～の」の声の安定度合いも違うんです。収録中、何度も、「やっぱり上手いよ」「違うね～」となつみかんさい君としゃべっていました。

アジュラは、巨乳シリーズではグラディスやゼビアの系統につながるヒロインです。シナリオを書く前から、グラディスやゼビアとどう差別化するか、彼女たちと違うということをどう見せるのか、ということを考えていました。結果は、きっちり出せたかなと思います。シナリオでも差別化はできたし、さらに琴吹さんが差を際立たせてくださった。本当に感謝しています。

キャラ合わせの時、当初、琴吹さんはＯＫテイクになったものよりは女性っぽいキャラ、つまり、もう少し女性的で可愛らしいキャラをイメージしてくださってたんですね。ただ、それだとただの女剣闘士になってしまう。

アジュラは、最高位剣闘士です。つまり、剣闘士の世界のチャンピオンです。もの凄く強い剣闘士です。その、もの凄く格上の剣闘士なんだぞって部分、最高位剣闘士なんだぞって部分は、出したかった。そこをキープしておかないと、あとのキャラクターアークがもったいないことになってしまう。

それで、「もうこれ以上やったら、かわいくなくなっちゃう」という寸前のレベルまで、最高位剣闘士としての強い感じ、凛々しい感じ、勇ましい感じを出していただいて、最高位剣闘士の雰囲気を出していただきました。主人公たちに対してきついことを言う時にも、感情をむき出しにするんじゃなてく、最高位剣闘士の格を見せる形でお芝居をお願いしました。特に怒りの感情なんかそうなんですが、ストレートに感情を表現してしまうと、雑魚キャラが怒っている感じになっちゃうんですね。でも、アジュラは最高位剣闘士です。雑魚剣闘士ではない。めちゃめちゃ強い、トップの剣闘士です。だから、それだけの格を持った怒り方を見せなきゃいけない。怒りの中にも余裕と威厳がな

ければいけない。それは、琴吹さんがしっかり演じてくださいました。おかげで、彼女をものにした時、つまり、エッチシーンに入った時に、ぐっとくるようになっているんじゃないかなと思います。

エッチシーンは凄くよかったです。

アジュラの台詞は結構乱暴なものが多いんですが、乱暴になってえぐくなったりしないように、お願いして、それを実現していただきました。おかげで、乱暴なのにエロい、乱暴なのにかわいい感じになっています。強い女剣闘士がどんなふうに喘ぐのか。親密な間柄にだけ見せる彼女の素顔を、是非、みなさんには楽しんでほしいなと思っています。

アジュラの中にも剛（凛々しさや勇ましさ）と柔（可愛さやからかいの部分）があるんですが、結構その演じ分けやお芝居は難しかったはずなんですが、琴吹さんがもの凄く魅力的に演じてくださいました。収録中、「やばい、これ、アジュラに人気集中してしまう、アジュラが人気トップを取ってしまう」って、本気で心配したくらいです。

本当はお芝居的に難しかったはずなのに、役者さんの力ですんなり進んで難しさを意識しなかった、実に稀有なヒロインです。

■ ゾーエ

ゾーエは、ウェットな知的キャラ。つまり、根っこはウェットで、表面は知的キャラなんです。根っこは凄くウェットな女性なんだけど、表面は凄く知的な秘書タイプ。それがゾーエです。

キャラ合わせでは、最初、役者さんにはかなりウェットなイメージでいただいたんですね。でも、それはあとで出したいなと思っていました。ゾーエも、キャラクターアークを起こすヒロインです。それで、キャラクターアークのbefore/afterの対比のためにも、かなりドライな方向でキャラ調整をお願いしました。これ以上ドライにしちゃうと、今度はかわいくなくなっちゃうよ、という手前のラインでOKをさせていただきました。おかげで、凄く知的で、凛とした雰囲気を持った女神官になったと思います。

ゾーエは、知的で、主人公たちにも忠言を行うキャラクターです。でも、あくまでも秘書の分というか、助言者の分をはみ出すことはない。自分が上の立場の者であるような振る舞いはしない。きりっとした部分、凛とした部分を出すと、どうしてもそこははみ出しがちになってしまうんですが、はみ出した時にはそのたびに抑えるようにお願いしました。おかげで、助言者としての分を弁えた女神官ができあがったと思っています。

ただ、ゾーエは堅物ではないんです。同性のパイアと話す時にはきりっとした知的キャラという感じではありません。目上の人と話す時だけ、キリッ。それ以外だと、普通の女性になります。生身の人間でも、話す相手によって話し方や声の高さが変わったりしますが、それと同じです。その部分は、是非、楽しんでほしいなと思います。

ゾーエで一番苦労したのは、エッチシーンかもしれません。ゾーエは女神官なので、女神官の雰囲気を残したかったんですね。ただ喘ぐ女とエッチするんじゃなくて、女神官とエッチする。そういう感じを、プレイヤーに味わってほしかったんです。余裕と神官らしさとをキープしてほしい、とひたすらにお願いしていた記憶があります。

たとえば、乳吸い手コキのシーン。乳吸い手コキというのは、乳を吸うという、母性に甘える要素があります。同時に、手コキで責められるという要素があります。女性も、オッパイを吸われて感じています。でも、感じる部分が強くなりすぎてしまうと、責められているという感じがなくなってしまう。おまけに、女神官という部分がなくなってしまう。ただ、女が感じながら手コキしているだけというシーンになってしまうんです。それで、余裕と神官らしさとをキープしてくださいという形でお願いしました。三角さんのおかげで、いい感じになったと思います。

■ コンスタンツィア

コンスタンツィアは、全ヒロインの中で最難関のキャラクターです。キャラ調整が終わってお芝居が始まってからすぐに、いっしょにいたなつみかんさい君が「これは難しい！」って声を上げていました。

キャラ合わせでは、最初はほんわかした優しい未亡人という感じになっていました。ところが、コンスタンツィアというのは、結構男性に対して対等に発言する相手なんですね。声はほんわかした感じがあって優しくて冗談も大好きなのだけど、言う時は言うヒロインだったんです。それで、まず外画寄りにしていただいて、それからきりっとした部分、凛とした部分を加えていただいて。それでだいぶよくなって、迷ったんです。GOするか、しないか。現場の雰囲気としてはOKの感じだったんですが、もう少しきりっとしてください、男性と対等の感じにしてくださいとお願いしました。お芝居をいただいて、迷いました。現場の雰囲気としては、両方OK。むしろ、前の方がいいんじゃないかな、という感じでした。最後のバージョンだと、きつくなりすぎちゃうかも……という懸念も、現場から出ていました。でも、ふと思ったんですね。あとでコンスタンツィアもキャラクターアークを起こす。1つ前のバージョンだと、男性と対等という感じではないし、キャラクターアークとのつながりが弱い。最後のバージョンの方が、キャラクターアークとつながる。

それで、最後のバージョンを選択しました。収録が始まって、すぐに選択が正しかったことを確信しました。「これは難しい！」となつみかんさい君が声を上げたのは、その時です。キャラ合わせの段階で、最終バージョンの1つ手前を選んでいたら、たぶん、コンスタンツィアは失敗していたキャラクターになっていたと思います。三十三七さんじゃないと、絶対にできなかったキャラだと思います。三十三七さんじゃないと、冗談を言う可愛らしさと、元老院議員に対する対等の感じとを出すことは難しかったんじゃないかな、と思っています。　あとでお話を伺ったら、コンスタンツィアのような年齢のキャラを演じるのはあまりないということでした。ぼくは、え？　そうなの？　って感じでした。こんなにドンピシャなのに。声質もお芝居もキャラも、ドンピシャなのに。コンスタンツィアの「くす」と笑う感じ、男性をからかう感じは、ぼくの頭の中で聞こえている声そのものです。

コンスタンツィアのエッチシーンでは、特にパイズリでは余裕を持って優しくSで攻めてくださいということを、何度もお願いしました。コンスタンツィアはパイズリが上手く、主人公を翻弄するヒロインです。パイズリの時には、ヒロインは余裕を持っていなきゃい

けない。自分が感じてしまって余裕があまりないようなお芝居になっては、プレイヤーがコンスタンツィアに翻弄されている感じ、優しくパイズリで責められている感じが出ないんです。パイズリは、牝性を味わうプレイじゃなくて、母性を味わうプレイですから。なので、そこは何度もお願いしました。パイズリのシーンでコンスタンツィアに余裕が足りないなと感じた時には、すぐストップを掛けて、もっと余裕の感じでとお願いしました。おかげで、パイズリシーンは凄くよくなったと思います。パイズリ上手の女性には、やはり優しく余裕でいじめてほしい。その願いを、コンスタンツィアは叶えてくれていると思います。主人公より長けた性的テクニックを持っているのは、巨乳シリーズでも、シャムシェルとセレブリアとコンスタンツィアくらいですが、きっちりパイズリ上手な女性になってくれました。

■ ファルネリア

基本的に巨乳シリーズのヒロインというのは、あとで出てくるヒロインの方が格が高いんですね。平たくいえば、高貴になるんです。手に入れる女性はサクセスの褒美になるので、格の高い、いい女性が来るんです。

キャラ合わせで最初にいただいたのは、今よりも甘々な感じでした。でも、それだと「皇帝の養女」という部分が出ない。天使族という神々しい部分も出ない。

外画寄りにというのは伝えてあったので、もっとクールに、そして高貴な感じにお願いしました。高貴さとクールさとをキープしないと、ファルネリアはただの女の子になってしまうんです。天使族の感じも皇帝の養女の感じもなくなってしまうんです。それに、ファルネリアも大きなキャラクターアークを起こすんですね。だから、最初はとにかくクール&高貴を貫かなきゃいけない。結構何度もお願いしたのが、弟エクセリオンとのシーンです。姉として異議を申し立てるんですが、普通に文句を言っちゃうと、普通の女の子になってしまう。皇帝の養女という格をキープして、すなわち、クールさと高貴さとをキープして異議申し立てをする、怒りを見せるということをしないと、皇帝の養女という格は実現できないんですね。感情が入る場面って、格がもろに表れる場面なので難しいんです。でも、役者さんが力のある方だったので、凄くいい感じのお芝居をいただくことができました。

ファルネリアの収録は、凄く楽しかったですね。パイアと同じように喜怒哀楽のシーンがはっきりしていて。印象に残っているのは、哀のシーンです。物語中、とある悩みでファルネリアが苦しめられるというシーンが出てくるんですが、どういう哀しみのお芝居をするのか、どういうつらいお芝居をするのかで、その伝わり方が変わっちゃうんですね。感情は、ただストレートに表現すればいいわけじゃない。つらいがために、哀しいがために、逆につらさや哀しさといった感情が消失した形で来ることもある。とても難しいシーンでしたが、役者さんがしっかり演じてくださいました。

エッチシーンは順調に収録できました。

ファルネリアは、エッチシーンで凄くけなげな可愛らしさが出てくるヒロインなんです。だからこそ、序盤は高貴さとクールさと貫くことが必要なんです。役者さんには、日常シーンで高貴さとクールさとをキープしていただけたので、エッチシーンではとても可愛らしい感じになったと思います。

■エスケルダ&デストラ

デストラとエスケルダは、年齢が一緒で、仲がとても良いという設定になっています。収録で一番驚いたのは、実は演じてくださった役者さん同士も仲がとても良かったということ！　なんたる偶然の一致！　仲のいい子だから、相手がどんなお芝居をしてくるのかが凄くわかると話されていたのが、非常に印象的でした。デストラとエスケルダは合わせの音声（2人で同時に同じ台詞を言う音声）もあったのですが、その時も合わせやすかったようです。

デストラもエスケルダも、最初に説明したのは、馬鹿女ではありませんということでした。ドロニウムという市のお金持ちの娘です、と。下っぱの女ではありません。市のそこそこのお金持ち、裕福な家の娘です。育ちが悪い女の子が主人公に靡いても面白くありませんから、ということでした。デストラにもエスケルダにも、女の格は関わっているんですね。

デストラとエスケルダについては、今で言うと女子大生っぽいイメージですということも伝えました。有名で裕福な私立の大学に通っている、そこそこお金持ちのところの娘。

デストラは、絵柄が結構童顔の感じなんですね。でも、童顔っぽい感じにしちゃうと、女子大生ではなくなってしまう。もっと若い年齢の、ギャルになってしまう。だから、童顔っぽいギャルにはせず、かといってお姉さんすぎず。まさに若さピチピチの、若い女の子。色々年齢を上げていって、4回ぐらいキャラ調整をお願いして、ドンピシャのラインにしていただきました。

エスケルダは、最初からほぼドンピシャのイメージでした。キャラ調整は1回お願いしただけ。役者さんが用意してきてくださったキャラに、もう少し誘惑を入れていただいて、即OK！　全7人のヒロイン中、最もキャラ合わせで困らなかったヒロインです。

実は収録中、内心焦ってました。デストラを収録している時にもエスケルダを収録している時にも、「やばいヤバイ！　これは人気出そうだぞ！　やばいぞ！」と焦っていました。それくらいエッチシーンがよかったですね。特にエスケルダの誘惑は……！

エスケルダの役者さん、実は巨乳シリーズにずっと出演したいと思っていてくださったそうです。書き手としては、そんなふうにおっしゃっていただけるというのは本当にうれしいことですね。幸せだなと思います。